衛生などの環境規制の経済への影響について述べている.

1973年当時,米国のコークス生産量は63.5 Mt/y, 生産能力は67.5 Mt/y であつたが,1979年には各々52.5 Mt/y, 57.1 Mt/y と約17% 減少した. (またこの間に炉門数は約14.3% 減少している.) これに対応して米国はコークス輸出国 ('79年 1.4 Mt) から輸入国 ('79年 5 Mt) へと転じた. これには EPA などの環境規制が大きな影響をおよぼしている.

1977年の大気清浄化法修正条, 水質汚濁防止法修正条労働基準監督局の規制 (OSHA) によつてコークス製造業には多くの制限が設けられている. これらの規制の大半は各種排出物規制であり, コークス炉従事者を保護する粉塵被爆量規制である. 米国コークス製造業は工業発展地域に集中しており, この地域での環境基準は厳しい.

これら各種環境規制がコークス製造コストに与える影響を試算した. (前提: 50門1炉団, 4および6m炉) その結果は, ①投資コストの増加: 23 550千ドル (4m炉) 34 850千ドル (6m炉) ②操業および保全コストの増加: 5 425千ドル (4m炉), 7 725千ドル (6m炉) これは各々コークス1t当たり22.5ドルおよび15.5ドルのコスト増に相当する.

このように環境対策費は莫大な額になるので, その効果を十分検討してから投資の決定をする必要がある. しかし環境対策技術の開発および開発に伴う法律の改正などによつて投資の効果は変動してしまう. コークス炉のように長期間にわたつて使用する設備ではその期間中経済性が続くか否かは不明である.

環境規制は人類の健康と社会福祉のために考えられているので, その便益性を本質的に評価することはできないだろう.

(桐谷　利信)

コラム

レッテルと中味

個人の職業, 職種の表し方は多種多様である. 御専門はと聞かれた時, いつも何と答えるべきかとまどう. 企業間では, 事務屋, 技術屋という大きな分類から始まり, 出身専門別, 例えば機械屋, 電気屋, 冶金屋等, 更には鉄鋼業界内ではプロセス別, 例えば, 製銑屋, 製鋼屋, 圧延屋等, または製品別にパイプ屋, 厚板屋等々と呼ばれる事が多い.

これらの分類は, まさに T.P.O. に応じて使い別けられ, それで多くの場合お互いに通じ合つているのが現状であろう. しかしレッテルは自分ではる場合だけでなく他人からはられ, そしてレッテルだけがいつまでも一人歩きする危険性がある. 企業内でも, その道一筋という人はまだよい. 次々と仕事が変わつて来た場合, 自分でさえ適切なレッテルを選ぶのは難しい. いわんや古いレッテルを持ち出され, あるいは何々屋だからと言われ, 大変迷惑する場合がある. レッテルは所詮レッテル, 中味は今の自分一つ, この中味で事を処して行くと割り切つて, おつき合いさせていただくようにして行くしかない.

話は変わるが, 春秋の大会で発表される講演の分類は協会で永年用いられて来た分類法で大別され, プログラムが編成されて行く. この過程の中でどこに入れるべきか迷うものが, いくつかは必ず出て来る. 分類されるという事をあえて, レッテルがはられるといい変えてみよう. わかりやすいレッテル, 大勢の人が識別しやすく, かつ, はられる本人すなわち発表者が期待しているであろうレッテルを, すべてをカバーする様に適切に選ぶ事は大変難しい. 中味は一つ, レッテルは T.P.O. でと言つても, この場合は自分のレッテルを選ぶのとはわけが違う. 毎度不満が残らなければよいがと思いつつ, 多数の専門家の意見でまとまつて行くのだから, 大過はない筈だと割り切つて編成作業を終わらせている. このプログラムにより, すすめられる次の講演大会が, 大きな不満もなく無事に行われる事を願つているものである.

(日本鋼管(株)技術研究所　原　富啓)

編集後記

▶鉄と鋼第10号 (8月号) をお届けします. かねてからの懸案である掲載待ちの論文をできるだけ少なくするための対策のひとつとして, 本号では展望, 解説などの読み物記事を少し減らし, 論文, 技術報告を多く掲載しました. 編集委員会では, 貴重な論文ができるだけ早く掲載されるよう種々の対策をとつています. 本年3月から投稿論文の規定頁数が原則として刷り上がり8頁以内とするように改定されたのもそのひとつです. しかしいまだ完全には周知徹底されていないようで, 8頁を大きく超える論文がときどき投稿されてきます. 原稿執筆にあたつては, 投稿規定, 執筆要領に従つて, ぜひ図表や写真の字数換算をおこなつていただき, 規定頁数内におさまるよう簡潔に推敲された論文を投稿していただくよう希望します.

「随想」, 「談話室」, 「コラム」など肩のこらない読み物も好評をいただいているようです. 本号には新企画の「わが大学の思い出」が掲載されています. 今まで「海外だより」で外国の大学, 研究所の紹介はしばしばありましたが, これからは国内の大学の紹介もときどきなされる予定です.

盛夏の季節を迎え, 夏期休暇で大いに精気を養つておられる方も多い事と思います. 暑さをのりこえ, 秋の北海道の講演大会でまたお会いいたしましよう.

(T.M.)